

# 難波西鶴と 海の道

【66】

文(はやり歌)で何となくは知られていました。したがって、前回のコミカルな男色から女色への変節は、西鶴オリジナルの創作部分でしょう。

森田 雅也

に、衝撃的な作品でした。

もっとも、その各話が真

実か否かは分かりませんが、

特に姫路の「お夏」の場合、

また、生きているなどの説

話があり、「好色五人女」

のおまんを除く4人は、後

に近松門左衛門などが浄瑠

璃等に仕立てたほど格好の

題材でした。

しかし、薩摩源五兵衛と

おまんの恋物語は、大坂か

ら遠く離れた、謎の「薩摩」

の地というところから、よく

知られていませんでした。

おそらく、西鶴がまさしく

報を得ていたものでしょう

が、一昔前に、2人が恋愛

命も危うくなりませんが、そ

れが定着していないとき

前回から続く、『好色五人女』貞享3(1686)年刊『巻五』はその巻題「恋の山源五兵衛物語」が示すとおり、薩摩一の男前、源五兵衛の物語です。しかし、『好色五人女』ですから、本来は、女性主人公でなくてはなりません。

「好色五人女」のお夏、おまんの恋物語は、大坂から遠く離れた、謎の「薩摩」の地というところから、よく知られていませんでした。おそらく、西鶴がまさしく報を得ていたものでしょうが、一昔前に、2人が恋愛命も危うくなりませんが、それが定着していないとき事件を起こしたことは歌祭文(はやり歌)で何となくは知られていました。したがって、前回のコミカルな男色から女色への変節は、西鶴オリジナルの創作部分でしょう。

## 琉球屋で億万長者に

実家琉球屋が娘の所在を探し当てて、おまん夫婦を迎えてくれます。

両親だけでなく、琉球屋あけて大喜びで、源五兵衛は琉球屋のいろいろな鍵383を譲り受けます。

その鍵で内蔵を開くと、

大判200枚(約2千万円)

入の書付の箱650、小判

千両(約1億円)入の箱8

00、銀10貫目入(約2千

万円)の箱は、かびはへて、

下よりうめく事すまじ」と

というありさま。一分金(約

2万5千円)は七つの燈にあ

ふかれ、銅銭は砂のように

たくさんあって、むさがる

しいという、無尽蔵の金銭

がありました。

さらに内蔵を開けると、

これが、「琉球屋」の屋号

にふさわしい、珍品ばかり

です。次回は、この品々に

注目してみます。

(関西学院大学文学部文

学言語学科教授)

# どん底味わう源五兵衛とおまん